

EBM

■ **Step 2. 文献を検索する。**

- PubMed (MEDLINE)
- 医学中央雑誌
- Cochrane Library
- Best Evidence
- ACP Journal

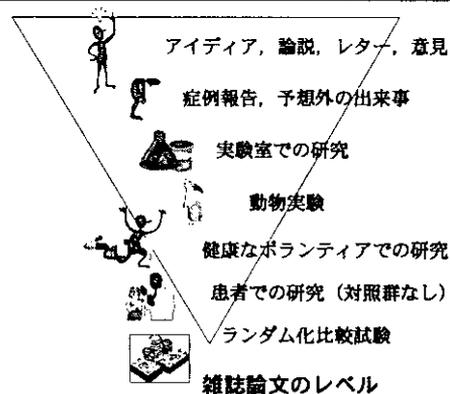
EBM

■ **Step 3. 文献内容の妥当性の評価**

- filter としての Publication Type
- Structured Abstract の利用
- Systematic Review の利用

検索のフィルター (PubMed)

- Subheadings:
 - diagnosis / therapy / etiology / prognosis
- publication type (PT)



Publication Type (出版タイプ:PT)

- Clinical Trial
- Clinical Trial Phase I
- Clinical Trial Phase II
- Clinical Trial Phase III
- Clinical Trial Phase IV
- Controlled Clinical Trial
- Consensus Development Conference
- Guideline
- Meta-Analysis
- Multicenter Study
- Practice Guideline
- Randomized Controlled Trial

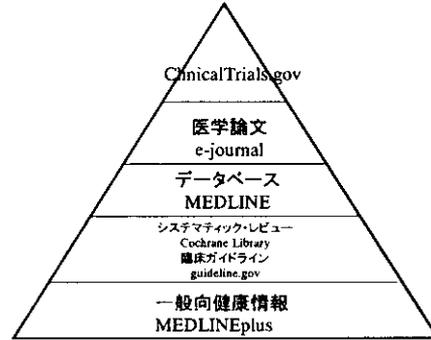
PubMed-Clinical Queries

研究デザインをフィルターとした
レディーメードの検索手法

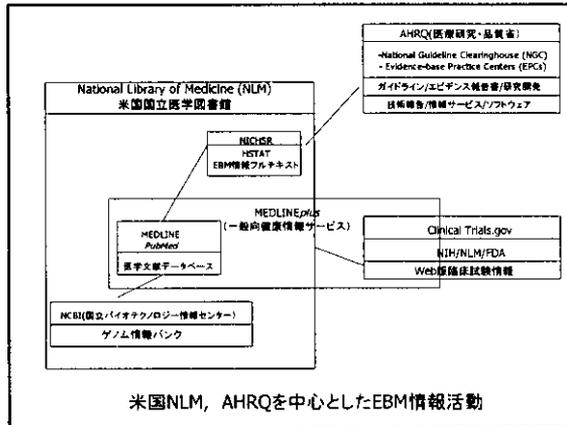
- 治療 / 診断 / 病因 / 予後
- 感度 (sensitivity), 特異度 (specificity)

PubMed/Clinical Queries: 研究デザインのフィルター

カテゴリー	強調	Sensitivity/ Specificity	検索式
Therapy	Sensitivity	99%/74%	"randomized controlled trial" [PTYP] OR "drug therapy" [SH] OR "therapeutic use" [SH:NOEXP] OR "random*" [WORD]
	Specificity	57%/97%	(double [WORD] AND blind* [WORD]) OR placebo [WORD]



NLMを中心とした米国のEBM関連情報資源の流れ

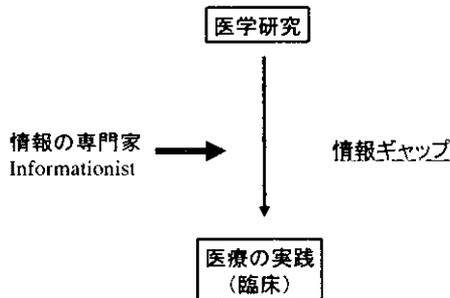


米国NLM, AHRQを中心としたEBM情報活動

Informationist の構想

(Davidoff & Florence, 2000)

- 情報学
- コンピュータ・サイエンス
- 臨床医学



(Davidoff, 2000)

Informationistをめぐる動き

- 2000. 6 "The Informationist: a new health profession?", Ann. Intern. Med. Davidoff & Florence
- 2000.10 Symposium at Philadelphia (JMLA vol.90, no.1, 2002)
- 2002. 4 Informationist Conference, MLA/NLM
- 2002. 5 MLA Annual Meeting, Dallas
- 2002.11 厚生科学研究班 現地調査

Informationist Conference, 2002年4月

- “Informationist”に必要とされる知識／スキルは何か、そして、それをどのように獲得するのか
- “Informationist”サービスの財政的基盤は
- サービスをどのように臨床／研究の場に売り出すか
- “Informationist”の考え方をどのように臨床／研究の場に適用させるのか
- “Informationist”の価値をどのように評価するのか

<http://www.mlanet.org/research/informationist/>

Informationistの要件

- 担当する臨床／研究分野の専門知識
- 情報の検索、分析、評価に対する高い技術 (filtering)
- 個人のスキル: コミュニケーション, 共同作業, チームワーク, 政策決定, 自己確信, 動機づけ, 多面的な思考, 活動的

Informationistの教育・訓練

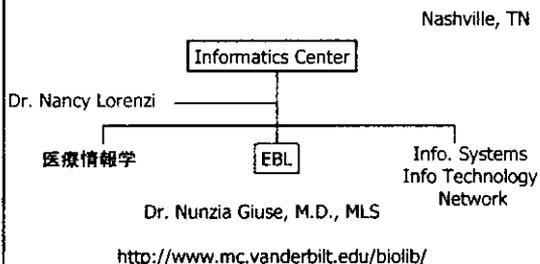
- 図書館員 ← 生物医学の知識
- scientist ← 情報学の知識

- 教育／訓練の場 — 施設内, 施設外, 大学, MLA, NLM
- 資格認定 — MLA, 国

Informationist — 残された課題

- 教育・研修をどのようにすべきか
 - 彼らは仕事場をどこで見つけられるか
 - このサービスに誰が対価を支払うのか
 - Informationistの有効性は証明できるのか
- そして、
- Informationistという考え方は実現できるのか！

Vanderbilt University, Medical Center Eskind Biomedical Library



EBL, Vanderbilt University

- Archives & Record Management
- Document Delivery
- Health Info. Services
- Health Seek Info. Education & Research Services
- Special Collections / Technical Services
- Web Development

スタッフ

専門職 17名 非専門職 17名
管理部門 2名

EBL — EBM based services

- Clinical Informatics Consult Service (CICS)
 - Research Informatics Consult Service (RICS)
 - Patient Informatics Consult Service (PICS)
- “情報専門職が、患者のベッドサイド、研究室について情報要求を確認し、情報サービスをする！”

EBL — CICS

- 臨床チームに図書館員が加わって、朝の回診に同行する。
- 個々の患者に特定の問題について、チームからの質問を確認する。
- その問題について、Just-in-time(数時間以内)に解答を提供する。
 - データベースの選択
 - 適合文献の選択
 - 文献を読み、サマリーをまとめる
- 図書館員での検討会

EBL — CICS — 情報パケットの作成

- 適合文献にマーキングをする(3文献程度)
 - 章立て(目的, 方法, 結果, 結論, 考察)
 - 図表のタイトル
- 適合文献のサマリーの作成
- 質問に対する解答サマリーの作成
- 情報パケットを臨床チームに渡す

EBL — CICS

- 図書館員 14名 → 12の臨床チーム
- 臨床チーム
 - ICU, NICU, Ped – ICU
 - Trauma, Cardiology, Hematology, etc.
- Evidence Based Site (内部用)
 - CICSで作成された質問解答のデータベース(現在, 425質問を蓄積)

EBL — CICSの評価

- 図書館員による評価
 - Search Talk : 検索語 / 検索式についてのグループ討議
 - Gold standard search strategy
 - Filtering Teaching Conference (FTC)
 - 質問に対する最適な3論文の選択の練習
 - Gold Standard 文献を見つけられるか—実習 / 演習
- 医師による評価
 - 臨床チームの評価表
 - Informatics Ctr.の専門家2名による評価

Vanderbilt — EBL のInformationist活動

- Dr. Nunzia Giuseの強力なリーダーシップ
- 医療チームとの良好なコラボレーション
- スタッフの高いモチベーション
- “Putting Librarians into the clinics is the Top Priority” という過激な考え方 (Plutchack, JMLA, Oct, 2002)
- まだ、試行錯誤の時期である(Giuse)

わが国での図書館からのEBM活動

- リサーチ・ライブラリアン・ワークショップ(厚生科学研究)(1999-)
- ガイドライン作成過程での文献検索の支援(京都大／近畿病院図協, 慈恵医大, IMIC, 医中誌, 他)
- 慶応大学北里記念医学図書館での文献情報サービス活動(1970年代)
 - 文献分析(SDIサービス)
 - PFOS (Personal File Organization Service)
 - 特定プロジェクト(レビュー作成)

EBM医療情報サービス センターの設立

- 診療ガイドライン
- データベース

医学図書館員のEBM活動のためのケース

(例)

- 朝日新聞 2002年11月17日(日)
“くも膜下出血:血管内手術死亡率低く”
- “Lancet”誌 (Oxford 大学グループ)
- 2,000人の患者—無作為に2群に分け, 2つの方法で臨床試験を44施設で実行
- 死亡／障害は
開頭手術—30.6%
血管内手術—23.7%
- 日本では血管内手術は全体の12%

EBM ケーススタディ

- PubMedで検索
- “Lancet”論文のMEDLINE抄録, 索引データを見る。
- “Lancet”論文を読む(電子ジャーナル)
- PubMed検索結果から, 関連文献を選び, 原論文を見る。
- 医中誌データベースを検索
- 図書館／JMLAのEBMグループでの討議

医学図書館員の自己改革のための処方箋

1. 主要な専門雑誌を読みなさい。
2. 学会に出席し, 会議録を読みなさい。
3. 様々な図書館の現場を訪ねなさい。
4. 自分の図書館で研究を行いなさい。
“研究が成功を産みだす。”

(Ellen Detlefsen, 野添, 酒井, 1993)

Special Thanks to :

- Dr. Ellen Detlefsen (University of Pittsburgh)
- Dr. Nunzia Giuse (EBL, Vanderbilt University)
- Dr. Nancy Lorenzi (Vanderbilt University)
- Dr. Valerie Florance (NLM)
- Pamela Sieving (NIH Library)
- Betsy Humphreys (NLM)
- 酒井 由紀子 (慶応義塾大学医学メディアセンター)
- 磯野 威 (国立保健医療科学院研究情報センター)
- 四谷 あさみ (愛知淑徳大学大学院)

講義の構成

このワークショップは講義内容のバランスがとてもよかったことが大きなポイントであった。EBM 実践のためには情報の生産・流通・利用という非常に広い範囲においてそれぞれの専門家が関わる必要があり、様々なレベルで EBM 関連の活動が行われているが、その大きな枠組みの中で情報専門家はどのように位置付けられ、関わるべきかという点が全セッションを通して受講することによって明確になるよう構成されていた。

講師陣は臨床医、医学および情報学の研究者、情報専門家から構成され、内容は EBM の基本と EBM には欠かせない初歩的な疫学知識、文献の批判的吟味、小グループ学習による EBM の教育技法、文献の網羅的収集と研究デザイン、情報専門家の EBM への関わり方など多岐にわたっていた。セッションは講義と実習がほどよく組み合わされており、情報専門家として必要な知識と技術をひと通り身につけられるよう網羅されていた。ただ、受講生の EBM に関する学習・実践経験と知識にばらつきがあったため、人によって簡単だと感じたり、また難しすぎると感じたセッションもあったのではないと思われる。

個人的には、臨床医による現実の医療現場・教育現場での体験談を交えながらの、時としてラディカルで刺激的なセッションがとても面白かった。一般に医師向けの EBM 解説書は臨床事例に沿った内容のものが多いが、その中には専門用語が頻出するため私のような素人には事例そのものを理解できないことが多い。今回は事例について一般の人でも理解できる言葉に噛み砕

いて説明しながら進行されたので、最後まで興味深く聞くことができた。

参加者の多様性

「情報の専門家のための」ワークショップと銘打ちながらも参加者の所属や身分は多様で、図書館員、歯科医師、医師、研究者、大学院生、大学生、データベース製作関係者などが参加していた。このことによって専門や身分を越えた情報交換が可能となり、EBM の視点では密接な関係がありながらも普段交流のない分野の状況を理解すると共に、問題点を浮き彫りにできたという点で意義深いものであった。特に、全体のディスカッションで出された様々な意見やコメントから学ぶことが多かった。

例えば、現在日本の医学系大学では情報検索や情報学教育は必修になっていないが、大学でこれらを教えることを必修にするべきであるという一方、それが現在カリキュラムに組みこまれていないとしても、図書館員が持っている情報検索のノウハウを積極的に売りこんで組織の体制を変えていくくらいの意気込みが必要ではないか、という意見は大学図書館に勤務する私にとって大変参考となった。また参加した研究者、大学生や院生（医学系、看護系）からは、ここで学んだ情報検索の知識と技術は役に立つものであり、もっと早く学ぶ機会があったらよかったという意見があり、教育現場に取り入れる必要性への確信をさらに強めた。

もうひとつ特徴的だったのは、ある時間は講師だった人も、他の時間には一受講生となってセッションに参加していた点であった。異なる分野で活躍する専門家が、相互に学び合っている場面を目の当たりにすることも私にとっては刺激的であった。

今後の希望

講義内容の部分でも少し触れたが、受講生のレベルにばらつきがあるので、今後レベル別のコースを開設していく必要があるのではないかと感じた。EBM に関するこの類の講習会にはもう何度も参加し、自分なりに勉強もしているという人にとっては同じ内容を反復する場面が多々あるはずなのであるが、そのような人でもまだ実践レベルの十分な知識と技術を身につけていないと感じられないため次の機会にも参加してしまうという状態なのではないだろうか。レベル別にターゲットを絞ることによってより効果的な教育コースを実現すべき時期に入っているといえるだろう。またそれらのコースには、事前に課題や参考資料を与えて、学習してきた内容について疑問を解決したり議論する機会があることを希望する。

それからもうひとつ、今後、EBM の概念と基礎はもうわかっているという情報専門家向けに、医療非専門家にわかりやすい臨床事例の解説が付いた EBM 練習問題集のようなものがあると効率よく自己トレーニングができるのではないだろうか。

感想

普段まとめてこれだけの話を聞きディスカッションする機会はないため、とても充実していた。これまで、EBM の講習会に参

加していても EBM 実践において情報専門家がどんな所でどれほど必要とされているのかがはっきりせず、何をしたらいいのかわかまひとつ自信がなかったのだが、今回それが明確になったという点で有意義であった。様々な活動をしている図書館員がいることを知り、また情報専門家が必要とされていることを医学専門家に指摘されたことから、自分も何か行動を起こすべきであると強く感じた。

「第1回 EBM を支える情報の専門家のためのワークショップ」参加報告

東邦大学医学メディアセンター 平輪麻里子

・ワークショップの内容について

EBM や RCT などの記事が新聞に掲載されるようになるなど、EBM に対する関心は、医療関係者のみでなく一般市民にまで広まりつつあります。このような状況の中で開催された今回のワークショップは、「EBM における情報」をキーワードに EBM の基礎、検索実習、実際に医学図書館員が EBM においてどういった役割を果たせるかといったディスカッションなどを通して、今後の情報専門職の姿を考察する充実した内容でした。講師による一方的な教育ではなく双方向性のある形式で開催されたのも、刺激があって良かったと思いません。

初日は EBM の基礎について講義を受けました。ICU の医師である福岡氏は、病態生理学的事実から治療するとかえって患者が死亡してしまうことがわかった実例などを使い、エビデンスの「妥当性」「定量的結果」をふまえて判断する重要性について解説され、現場での EBM を身近に感じられました。司書である酒井氏は、「情報」が EBM の主役であるから、EBM に情報専門職の参加が必要であり、そのためには EBM の知識、医学知識、EBM 特有の情報検索技法など様々な知識が求められるなど自身の体験をふまえて、医学図書館員がどのように EBM に関わっていけるのか、今後の方向性を具体的に提示され有用な内容でした。

2 日目の EBM の実習における名郷氏のトレーニングは、小グループに分かれて、意見交換やロールプレイを行いながら EBM のステップを学ぶことにより、今までにない具体的に EBM の流れをつかめたと思います。PubMed を使った情報検索の実習やメタアナリシス、ランダム化比較試験、コホート研究などの論文の研究デザインの分類と、エビデンスの強さなどの解説を通じて、研究デザインは EBM 実践にあ

たって医学図書館員の必須知識と再認識しました。

最終日は前日までの内容をふまえて、今後の情報専門職の EBM へのかかわりについての講義とフリーディスカッションが行われました。小田中氏がライブラリアンの立場で EBM に関わった例は、情報専門職の方向を考える上で参考になりました。

講義内容はいずれも楽しく、聴衆を引きつけ飽きさせない講師のテクニックの面でも参考になりました。

・今後の情報専門職のありかたについて

EBM には、エビデンス（情報）を「つくる」「つたえる」「つかう」という3つのプロセスがあり、今まで図書館員はこの中の「つかう」という部分で、主に文献検索に関わってきましたが、これからはそれ以外のプロセスでも、情報専門員として関わる機会があることを、今回のワークショップで認識しました。自分の仕事を EBM の面から見ると、EBM 関連データベースの開発を目的にした、日本ハンドサーチ・エレクトロニックサービス研究会の RCT 論文を探すためのハンドサーチへの協力は、「つくる（エビデンスの生産）」プロセスへのサポートと言えるでしょう。

とはいえ、やはり図書館員として本領を発揮できるのは、「つかう（エビデンスの消費）」プロセスでの行動です。最近では1-2年生から問題解決型の授業が増え、早い時期からの情報リテラシー能力が必要になってきていることもあり、医師だけでなく学生にも EBM のための情報入手法を図書館側が担当していくことが一番手近な行動だと思います。その先に、酒井氏や野添氏の紹介にあった、Vanderbilt Univ. の Informationist のような臨床に密着しての文献提供活動があるのでしょうか。また、EBM は医療関係者のみではなく、患者や一般市民が臨床上の決断を冷静に行うため

に重要な役割を果たします。医療消費者への情報サービスは、様々な方面で活動が始まっていると思いますが、これらの活動を EBM をキーとして、点ではなく面として広めていく必要があると感じました。

診療ガイドライン作成のための文献検索は、医学図書館員にとって重要な役割のひとつだと思いますが、実際に国内で作られたガイドラインを見ると、東京慈恵会医科大学と近畿病院図書館協議会が協力した3件を除いてほとんどが IMIC に委託されています。ガイドライン作成側の医師と図書館員のコミュニケーションが足りないのか、図書館側でアピールが足りないのかと疑問でした。フリーディスカッションの際に、この件について IMIC の担当者から現状をお聞きしたところ、文献検索自体の作業は簡単だが検索結果をデータベース化したり、作成側との連絡など事務局のような作業に多大な時間と人手が必要だということでした。この件については、図書館員が個人で協力するには難しく、組織的な枠組みが必要でしょう。

いずれにしても、これからの図書館員・情報専門職には EBM の知識や、スキルの向上が求められます。個人や職場での努力ももちろん必要ですが、日本医学図書館協会の教育研究委員の一員として、協会の教育活動を充実していかなければならないと思いました。

EBM は情報専門職の発展の機会であると認識し、今後の仕事に反映できる内容のワークショップでした。医学図書館員の参加をお勧めします。

「第1回 EBM を支える情報の専門家のためのワークショップ」参加報告

国立保健医療科学院研究情報センター 宮澤 博子

医療や情報に従事する者にとって「EBM」という言葉や概念を一度は聞いたことがある

が、実際に EBM を学ぶにあたっては、何をどこで、どのように学ばなければならないかということがよく分からないという状態であった。EBM に関して網羅的に学べる良い機会があればと考えていた折に、今回のワークショップがあることを知り、EBM 先進国の現状と日本の状況を把握すること、EBM の基礎を知り、情報を収集、評価できるようになるまでに必要な知識と技術がどのようなものかを知るとともに、今後自ら学んでいくために、少しでもその知識や技術が習得できればと考えて参加した。

今回のワークショップは「EBM を支える情報専門家のため」というもので、受講者に制限は設けられていなかった。基礎から学ばなければならない初心者と、ある程度の知識がある者との区別も特に設けられていなかったため、両者に有効なワークショップとはどのようなものであろうかという興味とともに、プログラムが高度なレベルに設定されすぎていて消化不良に終わってしまうのではないかと、3日間でいったいどのくらいのことを理解し吸収することができるのだろうかという不安があった。

実際に参加してみると、プログラムは、初日に「EBM の基礎」として、起源や歴史、EBM と情報に関する基礎を学び、2日目に「EBM の実際」として、必要な情報・資料を網羅的に収集・検索・集積するためのデータベース検索と、医学雑誌に掲載された論文を短時間で読みこなし、Patient, Exposure, Comparison, Outcome(PECO)を解析する実践練習、3日目に「EBM における情報専門職の役割」として、日本における EBM の課題についての講義とディスカッション等で構成され

ており、EBM の過去、現在、未来という全体を捉えられる内容になっていた。

特に印象深いのは実践的講義の2日目で、正確な情報を短時間で収集、提供することを目的として、幾つかの論文の PECO を解析したものだった。ある程度のスピードをもって英論文を読みこなしていくためにポイントを解説した講義は、医学・薬学の他に、統計学の知識や専門用語の理解が必要で、解析はかなり大変なように思われたが、講義自体は、かなり解りやすいもので、ポイントを押さえながら練習を重ねていくことによって、将来的には実践に現場で役立てるようになるという自信が持てたように思う。この講義を通して、現在求められている情報専門家像が具体的に分かったことも良かった。

また、今回のワークショップは、受講者がそれぞれ現場に戻ってから指導的な役割ができるようになることも目的とされていた。小グループに分かれてディスカッションをしながら問題を解決していくという講義では、全員が順番に進行役を経験するのだが、自ら指導的な役割をすることにより、課題を改めて捉え直す必要があり、個人としての理解を深めるのにも役立ったように思う。

今回の受講者は 40 人程であったが、EBM に関する知識の有無は受講者間でかなり差があったように思う。初心者のみを受講対象にした場合、理解を促しつつ、ある一定のレベルを維持することは困難であるが、既にある程度の知識を持つ者が混在しながらのディスカッションは、一定のレベル維持が可能となり、知識を持つ者にとっても指導的な立場からの問題が発見できる。受講以前には受講者が限定されていないことを不安に感じていたが、それはむしろ両者に有効なことであった。実際に私が参加したグループには、他の講義をされ

た講師の先生も受講者として参加されており、直接お話を伺うことができ、かなり良い勉強になった。

受講者の差異が有効と感じられたのは3日目のフリーディスカッションの場でも同様であった。今後の課題の一つとしてデータベースの整備に関することが上げられたが、図書館員・医師・看護婦・編集者など、それぞれの観点から活発なディスカッションができて興味深かった。

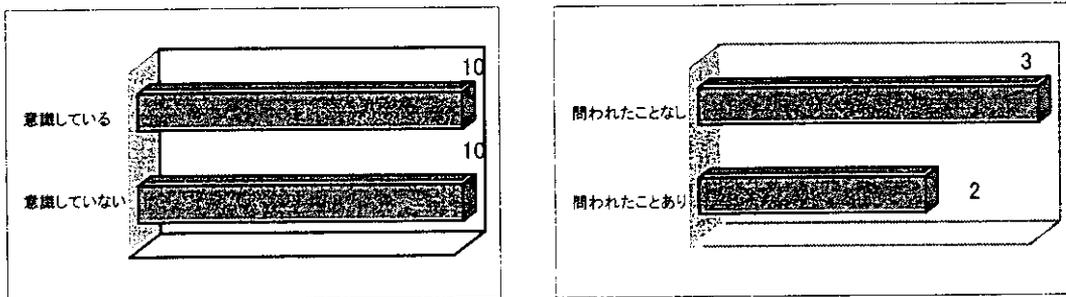
今回のワークショップは、EBMを支える情報専門家の必要性を再認識するとともに、実際に医療現場で活躍する情報専門家に要求されるスキルはかなり高度なもので、その習得には時間と努力が必要であることも認識した3日間であったが、全体としては、かなり濃密で充実したものであった。ワークショップに参加した個人的な収穫としては、自分の中の問題点が整理できて、今後何をどうしていったらいいのかがはっきりしたこと、スタートラインに立てたことであった。現在はまだ白紙の状態であるが、今回の経験をもとに基礎から継続して学ぶ努力ができれば、EBMを支える情報専門家として少しは何かができるようになるのではないかと感じている。

最後に、今後このようなEBMを支える情報専門家の育成に関して希望することは、海外のEBM教育コースとして講義で紹介されたように、日本においても長期間、網羅的に情報専門家を養成するコースができることである。望まれている声も多いと思うが、早い時期にそのようなコースができ、それに参加できたらと思う。

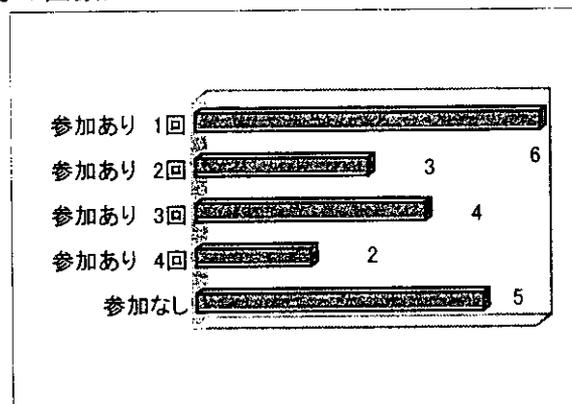
受講前アンケート解析結果 (回答数 20)

事前アンケート 集計

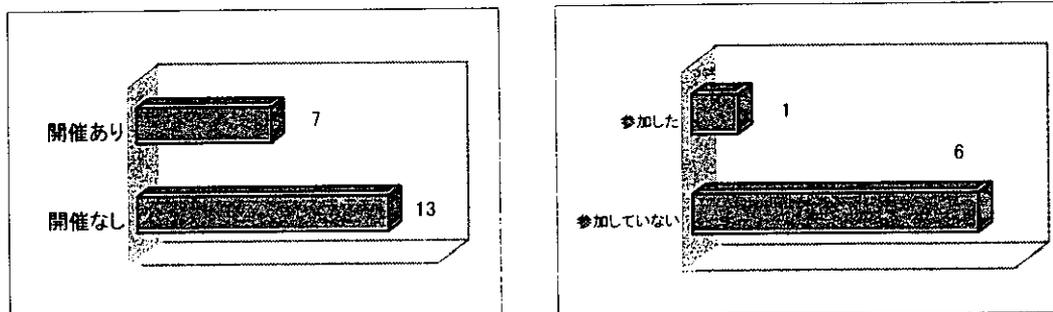
- 1) 文献検索法を図書館利用者に説明する際、日常、EBMあるいはエビデンスを意識していますか？ または、その方法を問われたことはありますか？



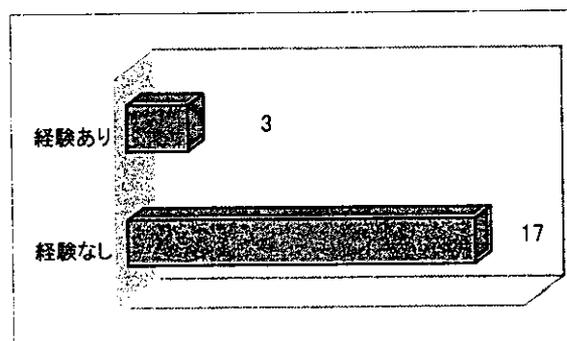
- 2) これまでに外部のEBM関連のワークショップやセミナーに参加した経験がありますか？ (あれば、その回数)



- 3) ご自分の所属する機関施設内で、EBM関連のワークショップが開催されたことがありますか？
 4) 3)の質問で、ある場合、ライブラリアンとして参加しましたか？



- 5) 国あるいは学会等が策定する診療ガイドライン作成にライブラリアンとして作業に係った経験がありますか？ (あれば、その疾患名を。)



★経験のある方の作業と疾患名

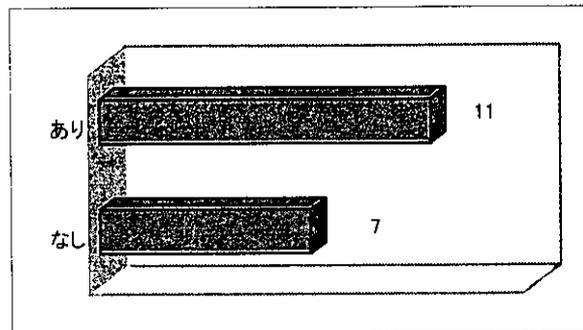
1 国内文献の検索とデータ提供

脳梗塞、クモ膜下出血、白内障、乳癌、大腿骨頸部骨折、腰椎間板ヘルニア、肝癌

2 乳癌、肝癌、脳梗塞など

3 クモ膜下出血、白内障、乳癌、大腿骨頸部骨折、腰椎間板ヘルニア、肝癌

- 6) テキストエディタ(ワープロ)、表計算ソフト、データベースソフトの間で、データを移動させた経験はありますか？



- 7) ライブラリアンはEBMにおいて、どのような役割を果たしていける、あるいはいくべきだと思いますか？

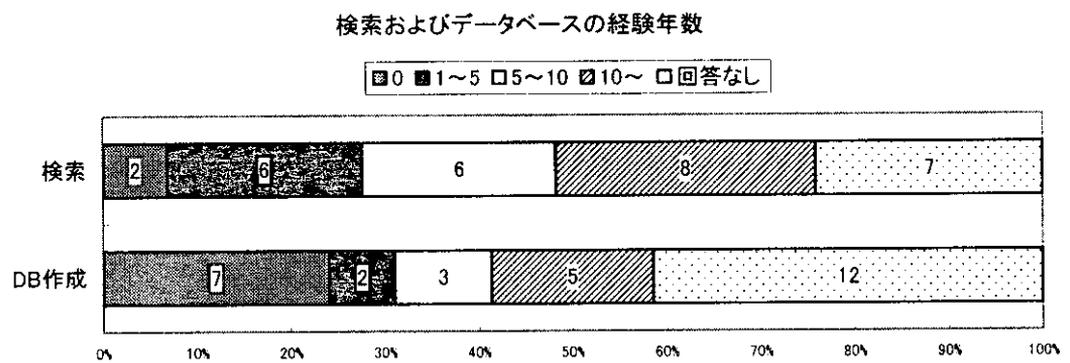
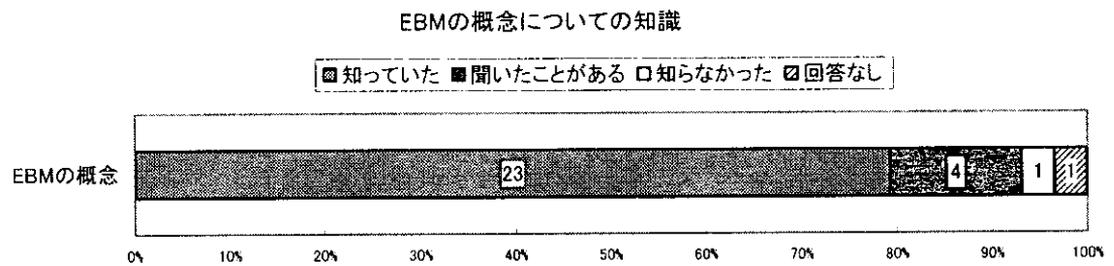
★意見

- 国内文献データベースのEBM対応。
- まだ、EBMの意識は少ないのでうまく回答ができませんが、4回生の情報検索演習や大学院、研修医の情報検索ガイダンスでせめて、うまく説明できるようにはしたいとおもいます。また、もう一歩進んで、検索にかかわることができればと思います。
- 1、2年後に国内版のガイドラインやEBM情報DBが医療機能評価機構によってサービスされるようになると、医師らは医局の個人のパソコンからDBを利用することが予想される。そのような中で、図書館職員はどのような形でEBMと関わるのかが、よくわからない。また、病院で発行する医学雑誌の編集を担当しているが、症例報告や統計報告が多く、RCT文献などはほとんどなく…。ということで、病院図書館員がどのような形でEBMと具体的に関わってゆくのか、が不明で、それらを学びたく、今回のワークショップ
- ライブラリアンの方と協力して臨床に役立つ何かができたら良いと考えております。
- 日常業務において、EBMを身近に感じた事がないのですが、検索指導等、重要な絞り込みの項目として頭にいれておきたい。
- 外国語の情報を日本語で解説する。
- ハンドサーチなどエビデンスのもととなる、論文の収集やデータベース作成への協力。診療ガイドライン作成時における文献検索などの協力。
上記に加えて、医療関係者・一般市民がEBMに根ざした適切な医療情報を入手できるための、ナビゲーターとしての役割を果たしていけると思います。
- 信頼性の高い情報を、迅速に提供し続けるため、情報の構築、評価、提供の各分野で研究を行っていくべきである。
- そのような役割を含めて基本的なことから、勉強させていただきたいとおもっています。
- 効果な文献(情報)検索・入手法の指導
信頼しうる文献(情報)の提供
- それを教えてもらうために参加させていただきます。
- 文献検索とフィルタリングを行うこと。またそれについてのコンサルタントを医療従事者に行う。
データベースの構築にもかかわるべきだと思う。
まだ時期は早いかもしれないが、将来的には臨床現場でより深く臨床にかかわった情報提供サービスができればいいと思う。
- 初めての参加なので、勉強させていただきます。
- ユーザーの要求に応じて適切な文献を短時間で検索し、示すことが出来る能力を備えていることが問われているのではないのでしょうか。
- 何もわからないので、これを機会に勉強したいと思います。

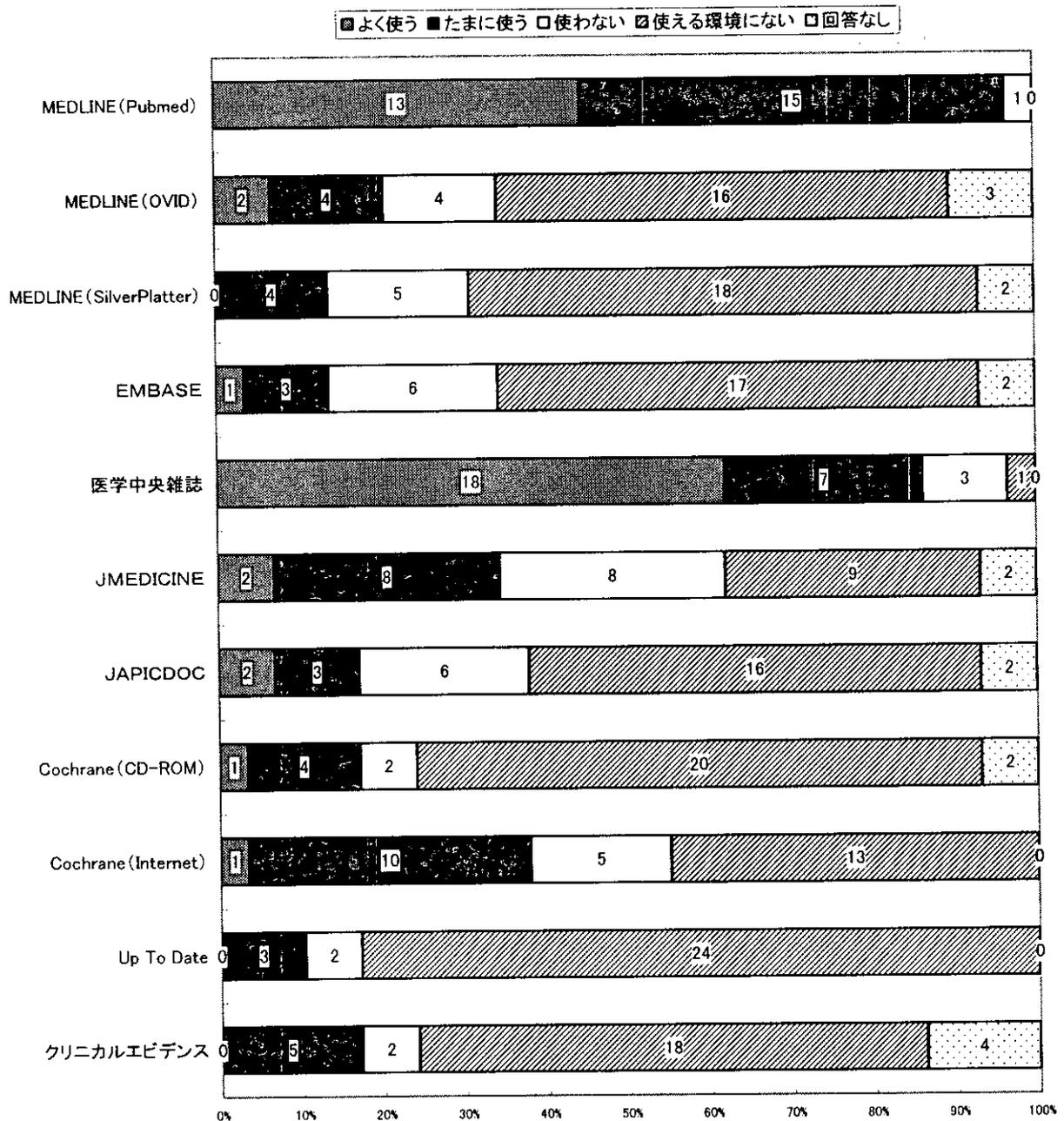
受講後アンケート解析結果 (回答数 29)

アンケート解析結果(回答数29)

(1) 参加者の属性



データベースの利用状況



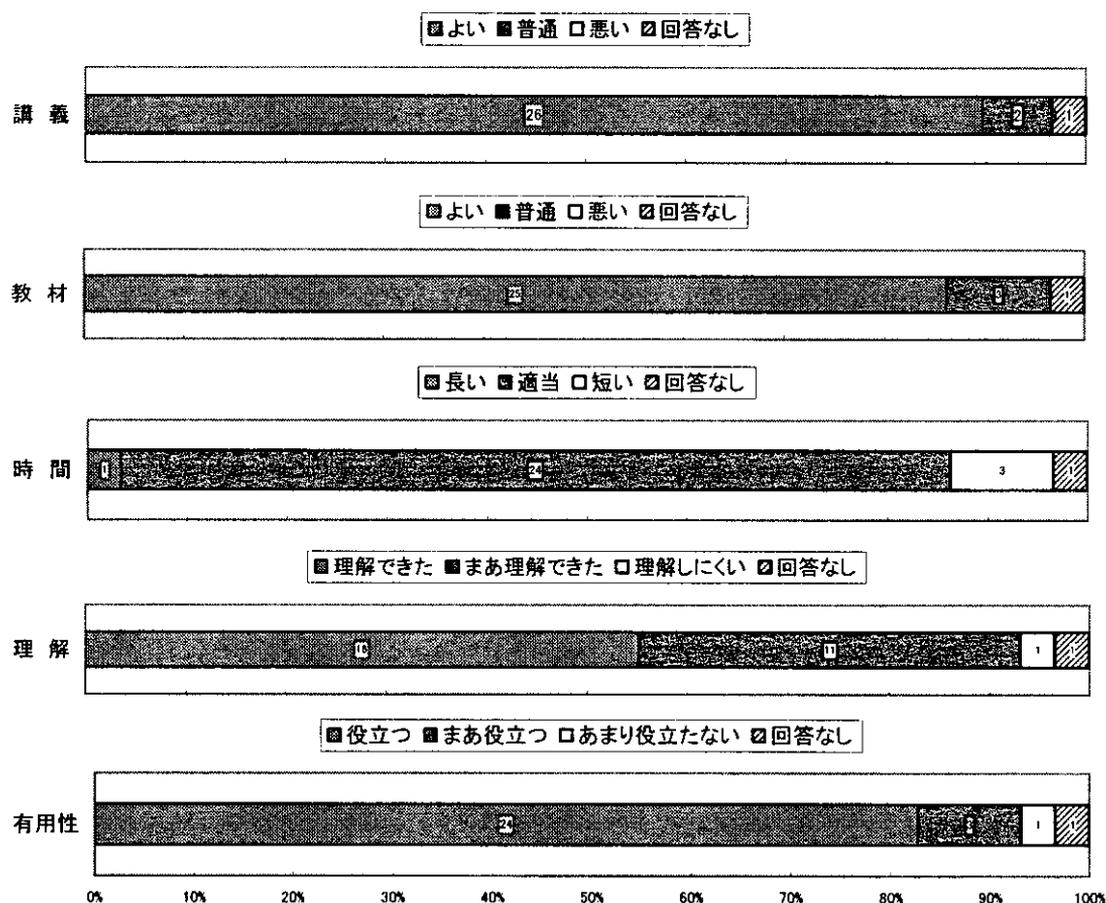
その他よく利用するデータベース
 Jornal Search(Infostream) MEDLINE(Dialog) DARE
 JOIS First Search DIALOG
 MD Consult

<データベース関連の要望>

- ・ 医中誌の抄録をStructured Abstract形式にしてほしい
- ・ 研究デザインのタグ付けもできるだけ詳細にしてほしい

(2) 各セッションへの評価

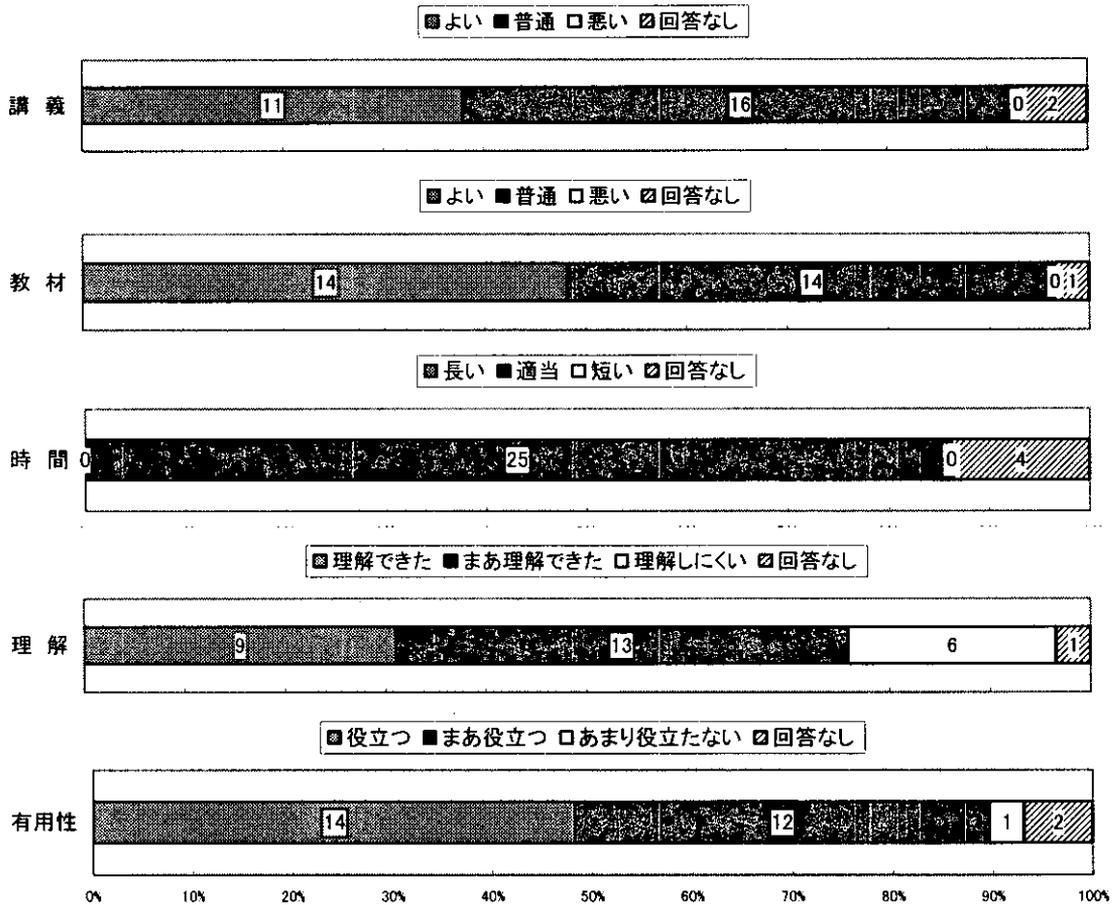
1. EBMとはなにか



<意見>

- ・身近な事例が多く、興味深く聞くことができた。
- ・臨床におけるデータベースの具体的な役割を知ることができてよかった
- ・話がわかりやすく、面白かった。
- ・統計入門がわかりやすかった。EBMを実践している医師の話は具体的で面白い。
- ・ドクターの立場からEBMを強く言って頂くとはげみになる。当病院ではあまり関心のある方がいないので、自分がどう広めてよいのかわからない。
- ・EBMは本を読んでもよくわからないところがあったのですが、とてもわかりやすく楽しい講義でした。
- ・アンケートを用いた、より具体的な講義はEBMについての概念を再確認することができ、非常に有益で理解しやすかった。
- ・リスク比を自身で考えてみる試みは、初めてだったのでとても新鮮でした。
- ・RCTの重要さがよく理解できました。
- ・EBMを実践することの困難さが伝わってきた。
- ・EBMに関してはあまり知識のない者にもわかりやすく、内容の濃い講義だった。
- ・時間の関係上、少し急いで話された部分をもう少しじっくり聞いてみたいと思いました。
- ・EBMについて、概念や基本的な統計知識はある程度図書館関係のセミナー本で学べるが、具体的に臨床で応用できる情報検索をすることは医学知識がないため難しいと感じている。色々な例について場数をふむ必要がある。

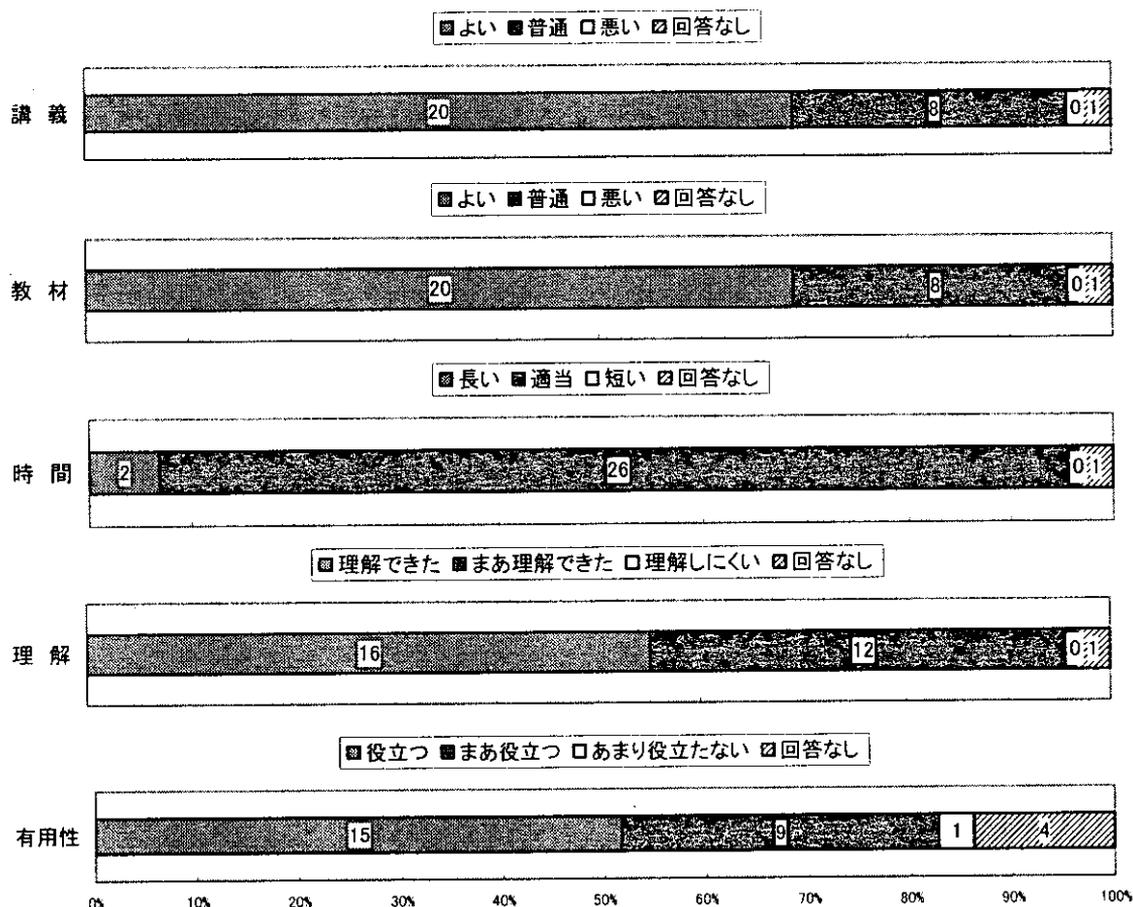
2. システマティック・レビュー概論



<意見>

- ・ 情報が多くて、自分の中で整理がつかない点があつた。メタアナリシスが今ひとつつかめません。
- ・ 統計学がやはり難しい。
- ・ 今までシステマティックレビューの言葉の意味さえわからなかった。津谷先生のようなすごい方に実際にお会いできるとおもわなかった。
- ・ EBMについてよく理解している人にとってはわかりやすい内容だったのかもしれないが、自分の理解度が低いせいか、講義がよく理解できなかった。
- ・ パワーポイントで作成された図表も資料としてほしかった。特にStartsDirectというソフトを用いたメタアナリシスの解析法は今回の講義で初めて知ったのでとても有益でした。
- ・ もう少し音声に気をつけてほしいです。聞き取りにくくて疲れました。
- ・ スライドとテキストが違っていたので話をききながらテキストのどこをみていいのかわからなかった。
- ・ 信頼区間の図はわかりやすかった。でも、いつも理解に苦しむ部分なのでもう少し詳しく聞きたかった。

3. EBMと情報



<意見>

- ・ 省略が多かったので少しわかりづらかったかも。EBMのオンラインコースはとても興味があります。
- ・ 興味深く聞かせていただきました。ただ、自分の職場に置き換えて考えると難しいです。
- ・ 医学図書館員がEBMにどうかかわっていくか、方向付けとして役に立ったと思う。
- ・ EBM知識・スキル獲得のための国内におけるセミナーやコースについてのお話があったらもっとよかったと思います。
- ・ 興味深い内容で面白かった。
- ・ 演者の講義は、今回で二度目だが、EBM実践における具体的な手法は参考になりました。
- ・ 米国での取り組みの紹介および提案だけでなく、その刺激をどのように現場で生かしているのか？どこまで取り入れているのか？等の具体的な話を聞きたい。
- ・ 二次情報の話をもう少し詳しく、特に歯科についても触れて欲しかった。
- ・ すばらしいプレゼンテーションでした。EBMでの図書館員の役割が明確にされていた。